

# Postnominal *that*-clauseを伴う shell nounsの複数形

日 木 満

## はじめに

英語の名詞にはfact, conclusion, viewなどに代表される次のような用法がある。

[1] I could no longer ignore the *fact* that he was deeply unhappy. (OALD)

[2] I've come to the *conclusion* that he's not the right person for the job. (ibid.)

[3] This evidence supports the *view* that there is too much violence on television. (ibid.)

これらの用法で使用される名詞を筆者流に定義すると、「直後に*that*-clauseを伴う抽象名詞(N)で、名詞句全体を『…というN』と訳せる名詞」となる。この類の名詞は今まで多くの研究の対象になってきたが、まだ確立された術語がないようである。Schmid (2000) の包括的な概観が明らかにしているように、この類の名詞(の用法)に注目した過去の研究者らは多少の違いはあるものの、上述の3語をはじめ、belief, doubt, hope, idea, likelihood, possibilityなどを含むほぼ同じ名詞群に対し、じつにさまざまな術語を提案している。例えば、Vendler (1968) は container nouns と呼び、Halliday and Hassan (1976) は general nouns という術語を用い、Francis' (1986) は anaphoric nouns、Ivanic (1991) は carrier nouns、Winter (1992) は unspecific nouns、そして、Schmid (2000) 自身は shell nouns という用語を使って、この類の名詞に言及している。

筆者が本稿でこの類の名詞を取り上げる目的は一連の命名の議論に参加することではなく、これらの議論の中でほとんど注視されることのなかった、この類の名詞の形(数の選択と定冠詞の有無)の選択原理の解明へ向けた研究の必要性を主張することにある。

筆者が特に名詞の形に注目する背景には、これらの類の名詞を使用する場合に[1]のような the fact that…からの類推がなぜか非常に強く働き、『…というN』と訳せる状況ではfact以外の名詞の場合でもほぼ自動的に名詞の非複数形にtheがついた形([the N that…])を連想してしまうという、個人的経験がある。この連想が必ずしも望ましくないことは以下のような英文をしば目にすることから明らかである。

[4] He dismissed *reports* that his party was divided over tactics and personalities. (BNC)

[5] The Hospital has refused to confirm or deny *a report* that the woman fell from an eighth floor window. (ibid.)

[6] He also dismissed *speculation* that he would resign as ALP leader, … (ibid.)

[7] The report, …, counters *concern* that young scientists and engineers have problems getting research funding and *suggestions* that they do worse than older colleagues because they have no established track record. (ibid.)

上の [4] - [6] は、それぞれ、「theなしの複数形 ([ $\phi$  N's that...])」、「theなしの非複数形 (可算・単数形) ([an N that...])」、「theなしの非複数形 (不可算形) ([ $\phi$  N that ...])」の例で、the fact that...からの類推では説明できない。[7] ではconcernとsuggestionの2つの名詞は同一文中で、どちらも動詞counterの目的語となっているが、どちらも、the fact that...の形ではなく、しかも、前者は [ $\phi$  N that...]、後者は [ $\phi$  N's that...] と異なる形となっている。

これらの例が示すように、問題の言語環境に現れる名詞の形は、名詞・文脈によりさまざまな可能性があるわけだが、どのような状況でどの形になるか、という名詞の形の選択原理の解明は先行研究でもまだ十分には行われていないように思われる。Quirk et. al. (1985) は、この類の名詞の形について言及している数少ない研究のひとつであるが、この類の名詞には、定冠詞theが共起することが普通とした上で、それ以外の可能性もあることを次の3例を挙げて指摘している (p.1261)。

[8] A message that he would be late arrived by special delivery. (下線は筆者)

[9] The union will resist any proposal that Mr. Johnson should be dismissed. (下線は筆者)

[10] Stories that the house was hunted angered the owner. (下線は筆者)

Quirk et. al.は特に [10] のような用例に言及し、このような同格的な後置修飾を伴う名詞の場合、複数形での使用は稀であり、belief, fact, possibilityなどの名詞の場合は普通、許容されないと述べている。しかし、その説明の直後に、"However, we occasionally find examples of plural nouns with appositive postmodification" (p.1261) とも述べ、次の [11] の文を例として挙げている。

[11] The reason probably lies in the facts *that* the Intelligence Service is rather despised, *that* the individual members change rapidly and are therefore inexperienced, and *that* they feel bound to put their own special interest first. (Quirk et. al. 1985, p.1261)

この点についてQuirk et. al.にはこれ以上の説明はないが、例文をみると、factに続くthat節が3つあることに気づく。つまり、「…と…と…という(3つの)事実」というような意味での複数形になっているものと想像される。Quirk et. al.のこの一連のコメントを筆者の推論を含めてまとめると、factのような名詞が問題の構文で使われる場合、普通、複数形は許容されないが、後続のthat節が複数現われる環境では、複数形が使用される(もしくは、複数形も可能になる)ということのようである。

Quirk et. al.の記述は、確かにfactという名詞について、その複数形使用のひとつの根拠(that節の数の複数性)を推論させてくれるデータを提供している点で、大変有益であるが、他の名詞、例えば、彼ら自身が使っている [10] の(後続のthat節は1つしかない) storiesの場合の複数形使用の根拠は何か、また、beliefやpossibilityなどの場合も、factのように複数形で使うことはoccasionallyにでもあるのか、もし、あるなら、その場合の複数性はfactと同じか、などは不明である。さらに、筆者のいう名詞の形の選択という観点からすると、上述 [6] のような「theなしの非複数形 (不可算形) ([ $\phi$  N that...])」の形については例文の提示も説明もない。

Schmid (2000) はコーパスデータ (Bank of EnglishのBritish section) を利用し、この類の名詞670語を詳細に分析している研究で、その知見に本研究は多大な恩恵を受けているが、残念ながら、複数形のデータは使用頻度が比較的稀との理由から対象外となっていて、複数形の用例提示も議論もほとんど行われていない。「theなしの非複数形 (不可算形) ([ $\phi$  N that...])」の形の用例は考察の中に見受けられるが、そもそも名詞の形はSchmidには関心外のようで、形についての言及はほとんどない。

以上、Quirk et. al. (1985) ならびにSchmid (2000) が名詞の形について共通して主張している点は複数形の使用は稀であるということである。

そこで本稿では、この類の名詞の形の選択原理を明らかにする試みの一步として、まず複数形的に絞りを、コーパスデータを基にこの類の名詞が複数形で用いられている実例の考察をしたい。

以下ではまずこの類の名詞と上で呼んできた名詞群の定義をし、本研究の研究課題と方法論を述べ、考察結果の報告を行う。

### この類の名詞の定義

本稿では、上で見てきたような用法の名詞を以下Schmid (2000) に倣い“shell nouns”と呼ぶことにする。Schmidは次の [12] [13] の2つの言語環境に現れる名詞をshell nounsと定義している (p.3)。

[12] Determiner + (Premodifier) + Noun + postnomial *that*-clause, *wh*-clause or *to*-infinitive

*The (deplorable) fact that I have no money.*

[13] Determiner + (Premodifier) + Noun + *be* + complementing *that*-clause, *wh*-clause or *to*-infinitive

*The (big) problem was that I had no money.*

なお、Schmidは言語環境の最も左に位置するDeterminerにはthe, a(an), this, no, some, my, -'sなどの他に、[14] のような例も議論の対象にしていることから、いわゆる無冠詞 (本稿では $\phi$ で表記する) も含むものと筆者は理解している。

[14] There is speculation that he may meet representatives there of Islamic Jihad as well as the visiting Iranian Interior Minister, Mr. Abdallah Nouri. (Schmid 2000, p.198, 下線は筆者)

本稿ではSchmidのshell nounsの定義と用語を援用しつつ、考察の対象を次の2点で限定する。まず、関係するclauseの種類をthat-clauseに限定する。(Schmidはthat-clauseだけでなく、wh-clauseならびにto-infinitiveも含めているが、clauseの種類の違いが、head nounの名詞の形の選択に影響を与える可能性があるので、clauseタイプごとの分析が必要となると思われる。) 次に、言語環境を [ 8 ] で示した名詞の使用パターン、つまり、名詞の直後にclauseが続くパターン、に限

定する。(Schmidは[8][9]で示した2つのパターンは、あくまでもshell nounsの定義に使ったものであり、この2つの他に主なものだけでもさらに別の2つのパターンで現れるshell nounsも考察している。)

従って、本稿で考察の対象は、Schmidの術語shell nounsの一部であり、正確には「postnomial *that*-clauseを伴うshell nouns」であるが、本稿では、以下、断りのない限り、単に“shell nouns”と呼ぶことにし、“複数形shell nouns”は、「複数形で用いられているpostnomial *that*-clauseを伴うshell nouns」を指すこととする。

### 本稿の研究課題と方法論

本稿の課題は、Schmid (2000) のshell nounsのうちpostnomial *that*-clauseを伴うものに限定した上で、コーパスデータを基に、(1) 複数形shell nounsがどの程度存在するかを検証すること、そして、(2) もし、かなりの頻度で複数形shell nounsが存在するならば、その複数性は何に依存するのかを推論すること、の2点である。

課題(1)の検証のためのコーパスデータとしては、筆者の利用可能なコーパスという制約のためBritish National Corpus World Edition (2000) (以下、BNC) を利用した。BNCはイギリス英語の書き言葉と話し言葉と両方を含む総語数が1億語のコーパスデータである。上述のSchmid (2000) が利用したBank of EnglishのBritish sectionもイギリス英語の書き言葉と話し言葉と両方を含む点では同じであるが、総語数は2億2,500万語である。したがって、本研究のコーパスはSchmid (2000) のそれと比して半分をやや下回るサイズということになる。

調査する名詞については、Schmid (2000) がBank of English (British section) の中で、絶対頻度が高かった非複数形shell nounsのリストを提供しているので (p.57)、そのリストの上位20語 (表1参照) を対象とした。

BNCでの検索にはSARAのQuery Builder queryを用いた。検索条件としては、1つ目のcontent nodeに問題の名詞の複数形 (POS codeはNN2) を、2つ目 (後続) のcontent nodeにthat (POS codeはCJT) をそれぞれ指定し、これら2つのcontent nodesをLink typeをNEXTで結び、検索実行した。しかし、この検索結果の中には、本稿の対象外である関係代名詞のthatが含まれている可能性があるため、あとは手作業でpostnomial *that*-clauseを伴う複数形shell nounsの用例のみを抽出した。

### 結果と考察

表2は、問題の20個の名詞がBNCデータ内で複数形shell nounsとして出現している頻度を多い順に提示したものである。なお表2には参考までに問題の名詞の複数形の頻度 (postnomial *that*-clauseを伴う場合も伴わない場合も含む、その名詞の複数形使用の総頻度) を付加した。

表1 postnomial *that*-clauseを伴う非複数形shell nounsの  
頻度による上位20語 (Schmid 2000)

順位	名詞 (非複数形)	頻度
1	fact	26,106
2	evidence	5,007
3	idea	4,812
4	doubt	4,010
5	belief	3,696
6	view	3,532
7	hope	2,727
8	news	2,572
9	feeling	2,511
10	impression	2,279
11	possibility	2,232
12	claim	2,194
13	suggestion	2,033
14	speculation	1,922
15	knowledge	1,794
16	sign	1,738
17	notionn	1,655
18	point	1,511
19	warning	1,460
20	fear	1,432

表2の頻度データを見ると、最も頻度の高かったfears (296件)を第一位に1件も確認できなかったpoints他4語まで、名詞によってかなり差があることがわかる。辞書の記述で一般に不可算形と記述されている(つまり、一般にはそもそも複数形がないとされる)news, knowledge, evidenceの場合に複数形が確認されなかったことは当然としても、ここでみた半数以上の名詞においては、先行研究が言うとおり、複数形での使用は確か非常に稀といえそうである。しかし、ここであえて注目したい点は、少なくとも表2の上位1から4位までの名詞fears, signs, claims, suggestionsについては200件以上の、5位のhopesにおいては100件の、複数形shell nounsの存在が確認されたということである。この結果は、名詞によっては、ある程度の頻度で使われる可能性を示すものであり、一概に複数形shell nounsは稀であるとは言えないことを示唆していると思われる。

表2 postnomial *that*-clauseを伴う複数形shell nounsの頻度 (BNC)

頻度 順位	名詞(複数形)	複数形shell nounsの頻度 ([Ns that...])	複数形の頻度 ([Ns])
1	fears	296	2,474
2	signs	267	4,464
3	claims	255	4,397
4	suggestions	246	2,080
5	hopes	100	2,154
6	facts	45	5,187
7	doubts	40	1,877
8	warnings	32	767
9	feelings	16	5,168
10	views	14	7,175
11	ideas	13	10,887
12	beliefs	10	2,370
13	notions	9	929
14	possibilities	4	2,408
15	impressions	2	695
16	points	0	9,834
	speculations	0	164
	evidences	0	38
	knowledges	0	22
	news	0	0

どこまでが「稀」でどこからが「かなりの頻度」かの明確な線引きは難しいが、名詞の形に関心がある筆者にとっては、100件、200件という数字は無視できない数であり、それらの名詞について、複数形で用いられている場合の複数性の根拠が何かについて考察する価値は十分にあると思われる。以下では、100件以上の頻度で複数形が確認された名詞(表2の上位5までの名詞)について、その複数性が何に依存するのかを推論するために、個別名詞ごとにBNCデータ内の用例の分析を試みたい。

#### [fears that...] の分析

Quirk et. al. (1985) が [11] のfactsの例から「複数のthat節の存在」を複数形shell nounsの1つ複数性要因として提示していると思われることはすでに述べた。そこでまず始めに、その要因がfearsに関係しているかをみてみた。BNCデータで確認された[fears that...] 全297件を調べてみ

ると、わずか4件に複数のthat節が確認されたのみであった(2つ目のthatが省略されている用例1件を含む。)下の[15]はthat節が2つの、[16]はthat節が3つの例である。なお、以下に引用する文はことわりのない限りすべてBNCデータからの抜粋であり、また、太字、下線、斜字体は筆者が強調のために加えたものである。

[15] Much of the anxiety among Members, particularly the opponents of televising, arose from fears that the broadcasters would not preserve a proper balance in their selection of matter to be covered and that they would, in their desire to present newsworthy stories, distort the public presentation of the House.

[16] There are real fears that they could be used to depress wages, that team work could be jeopardised and that women and staff from ethnic minorities will be further disadvantaged.

確かにこれらの例では、fearsの後に複数のthat節が続き、「…という不安」と「…という不安」というふういくつかの不安の内容を列挙していて、その複数性が複数形fearsの背後にあるのではないかと考えたくなるが、仮に両者の間に何らかの関連があったにしても、問題の4件を除いた残る293件の[fears that…]では後続のthat節が1つのみであったにも関わらず複数形fearsが使われていたという事実を考えると、少なくとも[fears that…]の場合には、複数形の要因としてはほとんど関与していないと考える方が妥当なように思われる。ちなみにQuirk et. al.の例にあったfactsについて、BNCデータ内で確認された用例をみると、全45件中の31件(7割弱)において、複数のthat節が確認された。このことは、Quirk et. al.の指摘の妥当性を確認する一方、同じshell nounsであっても名詞によって複数のthat節をとる傾向においてはかなりの差がある可能性も示唆しているように思われる。

以下では、BNCデータの用例を概観して[facts that…]の使われ方の特徴を考察する。

まず目にとまるのは、次のような存在を表すいわゆるthere構文([there BE fears that…])の使用である。

[17] But *there are* fears that this could change.

[18] *There are* also fears that tolls on motorways will simply push traffic onto other roads creating new patterns of congestion.

[19] *There had been* fears that increasingly vociferous Russian nationalism would cause the conflict to escalate.

このようなthere構文は111件確認された。これはBNCデータの中でfearという名詞が複数形shell nounとして使われているうちほぼ3回に1回の割合でthere構文で使用されていることを意味する。

次に注目された点は以下の例のようなamid, because of, despiteといったやはり存在を意識させられる前置詞(句)との共起である。

[20] The proposal came *amid* fears that the Ministry of Agriculture might introduce

tougher restrictions or even an outright ban.

[21] The stock market is still nervous of them **because of fears that** the cost of restructuring will slow down recovery.

[22] Construction of a massive hydro-electric project on one of Tibet's largest freshwater lakes is proceeding at speed **despite fears that** it could lead to ecological disaster.

頻度はamidが18件、because ofが24件、despiteが9件で、この3語だけで計51件確認された。ちなみにこの51件と上述のthere構文の111件とのデータの重なりはなかった。従ってthere構文とamid, because of, despiteの前置詞構文だけで全用例297件の半数以上を占めていることになる。

次にfearsに対する前置修飾語句の様子を考察する。まず、決定詞 (the, these, some, any, no)、数量詞 (many, (a) few)、基数詞 (twoなど)、ならびに、本稿で‘one’s’と表記するもの (my, theirなどの所有代名詞とthe young man’s, Bush’sなどの普通名詞・固有名詞の-s属格の両方を含むもの) との共起頻度は以下の通りであった。(以下これら4種をまとめて決定詞類と呼ぶ。なおこの分析では決定詞類と問題の名詞の間に形容詞等が入る場合も含む。)

表3 [fears that …] (297件) と決定詞類との共起頻度

the	these/those	some	any	no	many	(a)few	基数詞	one’s	(計)
5	0	2	5	6	0	0	0	27	45

ここで特に注意をひくのは定冠詞theとの共起頻度の低さである。上でthe fact that…などの場合にはtheが共起することが普通であるという趣旨の先行研究を紹介したが、その状況とは明らかに異なっている。これは、同じshell nounsでも非複数形での使用時と複数形での使用時では、theの要求度が必ずしも同じではないという可能性を示唆するもので、複数形shell nounsも研究の対象とする意義を示すものではないかと思われる。なお、theとの共起頻度が低い一つの要因としては、上述のthere構文での使用が多いという点が考えられる (there構文は一般に不定名詞句を要求するという制約をもつといわれている)。しかし、仮にこの要因が関与していたにしても、there構文以外でのtheとの低い共起頻度を説明するものではない。

the同様、these, some, any, noといった決定詞の低頻度と比較すると、one’sの27件は多少多いという印象を受ける。

以上の決定詞類の分析から、fearsはfear (不安) の所有者を明示することはあっても、基数詞やmanyやfewなどを使ってfear (不安) の数を具体的に示すということは、ないか、あっても非常に稀という可能性が推測される。

そうなると、具体的な数を明示しないで、かつ、存在を表わすthere構文や前置詞構文で複数形が多様されるという事実はなにを意味するのか、が問題になる。現時点での筆者の推測は、伝統文法でいうところのいわゆる「強意複数」的な使用である。つまり、数は曖昧のまま複数形を用いることによって、不安を感じる頻度の複数性を強調することによって、不安感の頻度、強さ、

広がり、など、意味を強める効果を狙った使用なのではないかということである。参考までに fears直前の形容詞（名詞の形容詞的用法も含む）との共起関係をみると、2回以上の頻度で共起した形容詞はwidespreadが6件、realが4件、new, renewed, growing, usualが2件であった。あえてこれらの中にfearsの複数性を探るとすれば、widespreadとgrowingにはfearの広がり（増幅感）が、realからはfearの強さようなものが感じられ、「強意複数」の部類に入る印象を受ける。

### [signs that...] の分析

[signs that...] はBNCデータでは計267件確認された。まず、複数のthat節が続くsignsの文を調べてみると、やはり数は少なく5件のみであった。以下に2例を示す。

[23] 'I would not wish to make the argument that we're sinking scientifically,' says Sir Eric, 'but there are signs that the squeeze has gone too far and that any further squeeze --- and all the evidence suggests there is another bit of squeeze in store for us this coming year --- will do real damage which will not be easy to recover from.'

[24] Although doubts may have been growing about the Woodvilles' ultimate intentions, there are no signs that anyone else was contemplating direct action against them --- or that the family had yet done anything to warrant it.

わずか5件という数から推測するに、signsの場合もthat節の複数性、つまり、どのような兆候なのかという“内容部分”の複数性はsignという名詞を複数形で使用することとは、仮に関係があったにしても、非常に薄いのでないかと思われる。

複数形signsの背後にあると思われる要因を探すべくデータを概観して、まず推測できることはその複数形は、sign（兆候）が示唆する事柄・内容の数ではなく、sign（兆候）自体の数の複数性に関与しているのではないか、ということである。つまり、上で見たようにthat節で示されている事柄・内容は（that節がほとんどの場合1つであることから）ひとつであるわけだが、その事柄・内容を示唆するsign（兆候）の数は1つとは限らず、複数存在する可能性は十分考えられる。例えば、次の[25]の用例ではthat節で示されている事柄・内容（つまり、「誰かがそこに住んでいた」という事柄・内容）を示唆するsign（兆候）は複数存在してもおかしくない（1つ目の兆候、2つ目の兆候、というふうに箇条書きできる兆候として）。

[25] There were three beds, three cupboards, one desk and no external signs that anyone inhabited the space.

次の[26]の例は、そのような箇条書きされた兆候（つまり複数の兆候）が文中に現われている。

[26] There are signs that she had been tortured: *severe cuts, her legs broken, her right arm dislocated*...

続いて、[signs that...] の統語的な特徴を見ていくと、最も顕著な特徴として挙げられる点は、下の例のような存在を表すthere構文の多さである。there構文での[signs that...] は187件で全体

の約7割をも占めていた。

[27] And *there are signs that* the central bank is now deliberately easing monetary policy.

[28] There were *signs that* consumers were borrowing more money for big projects.

決定詞類との共起頻度の結果は表4の通りである。

表4 [signs that...] (267件) と決定詞類との共起頻度

the	these/those	some	any	no	many	(a)few	基数詞	one's	(計)
18	1	10	4	21	5	5	1	0	65

決定詞類との共起関係でまず目にとまるのはone'sとの共起が0件である点である。27件確認されたfearsの場合とは対照的である。その背景には [fears that...] の場合「…という不安・恐れ」を抱いている人（不安の所有者）に関心が向くことがしばしばあるのに対して、[signs that...] の「…という兆候」の場合には、専らどのような兆候かという兆候の内容に関心が向くだけで、だれがその兆候を所有しているか（兆候の所有者）には向かないという点に関与しているかもしれない。

one's以外の決定詞類をみると、fearsの場合より全体的に頻度は高くなっている。特に注目したいのは、manyや (a) few、さらには基数詞といった、非常に明示的に複数を示す決定詞類との共起が計11件確認されたことである。(fearsの場合は0件であった。) それぞれ、1例づつ例を示す。

[29] Nevertheless, there were *many signs that* the unions, while still losing members, were still maintaining their resistance against wage reduction.

[30] So many exceptions had been made to earlier Navigation Acts by royal licence that it had sometimes looked as if they were intended to raise revenue rather than to direct trade, and in the 1660s there had been *a few signs that* the legislation which Charles had inherited from the Republic and had then extended might still be treated in the same way.

[31] When treating illness in children there are *two* very good *signs that* you have hit on the correct remedy: firstly, if the child vomits shortly after having the remedy, assuming he was not already vomiting all the time!

これらの用例には、やはり兆候の箇条書きのニュアンスが感じられ、複数形の使用の背後には、観察された兆候の頻度（種類、回数）の複数性が関与しているように思われる。

### [claims that...] の分析

[claims that...] はBNCで計255件確認された。その中で、複数のthat節は次のような用例が10件確認された（うちthat節の省略は1件）。

[32] The double response consists in the claims that there are infallible basic beliefs, and that those beliefs concern the nature of one's own sensory states.

[33] The new evidence contradicted Bush's claims that he was 'out of the loop' of those who approved the Iran-contra operation and that, when he did discover the arms deal, he was unaware of its quid pro quo element in regard to the hostages.

また、thatの代わりに、(i), (ii), (iii) を使って事実上の節を導入していると思われる以下のような例が1件確認された。

[34] Among the book's central allegations were claims that Mossad had (i) failed to inform the United States of prior intelligence concerning the October 1983 suicide bombing of the US Marine battalion headquarters in Beirut, the Lebanese capital [see pp. 32646-47]; (ii) established a secret spy network ('A1') in the USA; (iii) helped bring about the dismissal of Andrew Young from his post of US representative at the UN in 1979 after secretly recording Young's clandestine meetings with PLO officials [see p. 29956]; and (iv) caused the downfall of Prime Minister Itzhak Rabin in 1977 by exposing his wife's illegal foreign currency bank account [see p. 28533].

合わせて11件という数はfearsやsignsよりは多いものの、[claims that...] 全体からするとわずか4%程であり、factsのケースのように7割近くを占める様子とは明らかに異なっている。したがって、少なくともこのデータからは、that節の複数性は複数形claimsを使用する1つの要因である可能性はあるものの、主な要因ではないように思われる。

実際の使われ方に注目して、まず指摘したい点は、there構文との共起である。[claims that...] の計255件という数字は上でみてきたfears (297件) やsings (267件) とさほど変わらないのだが、上の2つの名詞で顕著であったthere構文はclaimsの場合わずかに15件と非常に少ない結果であった。

[35] *There are* persistent claims that Churchill sent a small group of secret agents to France outside SOE operations but, because no documentation exists, these claims are ridiculed by self-professed experts.

[36] The official turnout was 74 per cent, although *there were* claims that many voters had not been registered for the ballot.

これほど低頻度であるのにはなにかの要因があるはずであるが、上の例文のような用法をみる限り、筆者には現時点でなぜclaimsだけがthere構文でめったに使用されないのかは不明である。

一方、fearsで多くみられたamid, because of, despiteといったやはり存在を意識させられる前置詞(句)との共起の方は、despiteが19件、amidが9件確認された。(because ofは0件。

他にgiven, underneathとの共起がそれぞれ1件ずつ確認された。)

[37] RESIDENTS of flats devastated by floods in Conwy Morfa last night refused to move back into their property, amid claims that they were now structurally unsound.

[38] Despite claims that most of the fighting around the town had been carried out by Sihanoukist forces, Western commentators saw the offensive as the work of the Khmers Rouges.

決定詞類等との共起頻度の結果は表5の通りである。

表5 [claims that ...] (255件) と決定詞類との共起頻度

the	these/those	some	any	no	many	(a)few	基数詞	one's	(計)
20	0	0	0	0	1	0	0	56	77

表5のデータから考察できるclaims最大の特徴はone'sの多さである。one'sの56件は[claims that...] 総数255件の2割強を占める。内訳をみると所有代名詞が23件、-'s属格が33件となっている。以下に例を示す。

[39] Colleagues backed his claims that he was a scapegoat in a secret political row between BA and Government safety chiefs.

[40] The Republicans have placed great emphasis on their claims that the Democrat frontrunner Bill Clinton was guilty of anti American behaviour while he was a student in England.

[41] The new evidence contradicted Bush's claims that he was 'out of the loop' of those who approved the Iran-contra operation and that, when he did discover the arms deal, he was unaware of its quid pro quo element in regard to the hostages.

[42] A Norwegian scientist has challenged US space agency's claims that the ozone layer is rapidly thinning.

one'sの多さは、claimsの意味的な性質上、“誰の”主張かを明確にする必要が高いということの現れかもしれない。

one'sの多さとは対照的に、these/those, some, any, no, many, (a) fewならびに基数詞の頻度は非常に低く、manyの1件を除いて1件も確認されなかった。このことは、形は複数形でもclaimsにおける複数性の低さを表していると思われる。

なお、theとの共起は20件で、fearsほど少なくはないが、決して多いとも言えない。

[43] Financial institutions already favour their own to a greater extent despite the claims that the Edinburgh based Charlotte Square 'mafia' does not invest in Scotland.

[44] The same applies to the situation between nations: inequalities between developed

countries have not declined but this does not necessarily mean wholesale rejection of *the basic claims that* a certain level of education is a necessary prerequisite to industrialisation.

以上の分析を踏まえて、あえて複数形claimsの複数性を推察すると、主張されている事柄・内容の複数性と、主張という行為の頻度に起因する複数性の2つが考えられる。前者は複数のthat節によって示されると考えると、claimsはfearsやsignsよりもこの点での複数形使用の割合は多少高いということかもしれない。しかしfactsと比較すると、この要因の関与は決して高いものとは思われない。後者の要因については現時点ではまったくの推測にすぎないが、claimを複数形にすることによって、あるひとつの事柄・内容の主張が複数回が行われたことを示しているということが考えられる。しかし、その場合でも3回、5回、多くの、というような具体的な数え方をするものではなさそうである。数を明記せず曖昧なままにおくという点ではfearsの項で述べた強意複数的な使用と同じであるが、はたしてclaimsの場合にその複数形が主張の強さを表現する効果があるものかどうかは、現時点では筆者には不明である。

#### [suggestions that...] の分析

[suggestions that...] はBNCデータでは246件確認された。その中で複数のthat節が続くものは次の3件であった。以下に2例を示す。

[45] Although they didn't actually mention it, he said, he began to realise they were looking for suggestions that rituals had taken place, that he and his wife were part of it, and that their children were victims.

[46] The arrest of three police officers and two military captains who had been members of the elite UESAT unit of the Panamanian Defence Forces commanded by the former dictator Gen. Manuel Noriega, led to suggestions that a serious coup attempt had been intended, and that it had enjoyed wide support from the police.

わずか3件という低頻度は、suggestionsの場合もthat節の複数性が複数形使用に関与している可能性は低いことを示唆しているように思われる。

[suggestions that...] の統語的特徴を見てみると、次のようなthere構文での使用が目立ち、62件確認された。これは全体の四分の一に相当する。

[47] There are suggestions that Rolls-Royce may be unable to fund the cost of the new model, due out in the next few years, and that Vickers will not be able to carry the burden much longer.

[48] There were certainly suggestions that more explanation should have been given and that more discussion should have taken place.

決定詞類との共起関係をまとめると以下の通りである。

表6 [suggestions that …] (246件) と決定詞類との共起頻度

the	these/those	some	any	no	many	(a)few	基数詞	one's	(計)
0	2	7	5	0	1	0	0	5	20

共起した決定詞類の合計をみるとわずかに20件で、上でみてきた3つの名詞と比べて明らかに少ないことがわかる (fears=45, signs=65, claims=77)。特にtheとの共起が1件も確認されなかった点は、非複数形shell nounsで多くの場合theが共起する点との比較において大変興味深い。many, (a) few, 基数詞の共起がほとんどなかったことは、suggestionsが形は複数形をとっていても、具体的にいくつといった数を問題にする性質のものではないことを示唆しているかもしれない。しかしもしそうだとすると、246件もの複数形が確認されたという結果はどう解釈すべきか。あえて推測を試みるならば、suggestionsの複数性はsuggestする行為の複数性 (suggestする人、回数、などの複数性) に起因しているのではないかと考える。つまり、示唆の内容自体は一つであるが、示唆された頻度が一度だけではなく、曖昧な数で何回か・何度もあったということを伝えているのではないか。この意味ではclaimsの複数性の一部と似ているように思われる。

#### [hopes that…] の分析

[hopes that…] は上でみてきた4つの名詞と比べると絶対頻度の点ではかなり少なく、半数以下の計100件確認された。その中で、複数のthat節を伴うものは1件も確認されなかった。

[hopes that…] の用例を概観すると、いくつか比較的明らかな統語的特徴が観察できた。まず目にとまるのは、いくつかの前置詞との共起である。以下に問題の前置詞とその頻度をまとめ (前置詞とhopesの間に形容詞等が存在する場合も含む)、それぞれの1例ずつ挙げる。

[on hopes that…] (12件)

[in (the) hopes that…] (6件)

[behind hopes that…] (3件)

[despite hopes that…] (1件)

[49] High Street stores including Marks & Spencer, Boots and Argos were among the best performers in trading on hopes that consumer spending is at last picking up.

[50] I am in hopes that your sister Hattie will come to ease your convalescence at the Rectory.'

[51] BRITAIN'S second biggest housebuilder George Wimpey today threw its weight behind hopes that the UK housing market is on its way back from the slump.

[52] Despite hopes that some tasks inappropriate to junior doctors can be delegated to other groups of staff the new deal on juniors' hours risks worsening the situation by

increasing the intensity of work still further, notwithstanding the shorter working week.

There構文も多く次のような用例で計18件確認された。

- [53] *There are also hopes that a live trade in slaughter cattle could be developed with other EC countries over 1994 --- just as has already taken place with slaughter lambs to France.*
- [54] *In the wake of the Letelier decision *there were* hopes that celebrated cases of human rights abuse would soon be brought to justice.*

さらに特定の形容詞との共起で目立ったのはhigh hopesの組み合わせが5件確認された。

- [55] *The doctors told me they had *high* hopes that in a year you'd have made a full recovery.*
- [56] *Although his predecessor, Paul Channon, sounded a note of caution at last year's conference, there were *high* hopes that the party would include privatisation of BR in its next manifesto.*

その5件のうちの2件は[53]のようなthere構文との共起と重複していた。

以上の、前置詞、there構文、形容詞highとの共起を重複のあった2件を除いて合計すると、45件となり、これだけで、[hopes that...]の半分近くを占めていることになる。

次に、決定詞類との共起頻度は以下の通りであった。

表7 [hopes that ...] (100件) と決定詞類との共起頻度

the	these/those	some	any	no	many	(a)few	基数詞	one's	(計)
7	0	1	6	0	0	0	0	12	26

表7の示すように、共起した決定詞類の約半分はone'sとなっている。これは「…という期待(感)」の所有者を明記する必要度の高さを示すものと思われる。一方、many, (a) few, 基数詞などが0件であることは、hopesの場合も形は複数形でも、具体的な数を問題にするような複数性は持ち合わせていない名詞である可能性を示唆しているように思われる。

hopesの複数性について意味的な側面から考察すると、fearsのときのように、強意複数的な要因があるのではないかと推測できる。つまり、hopesと複数形にすることによって、期待感の増幅、強さを表わすのではないだろうかと思われる。

## まとめ

本稿はSchmid (2000) がshell nounsと定義づけた名詞の使用のうち、日本語で概ね「…という

N (不安、示唆、など)』の訳に対応すると思われるpostnominal *that*-clauseを伴うshell nounsに的を絞り、はたしてshell nounsの複数形での使用頻度が先行研究の示唆するとおり稀か否かをBritish National Corpusで検証し、もし複数形での使用が稀でないshell nounsが存在したならばその複数形使用の根拠を推論しようと試みたものである。

20のshell nounsを調べた結果、名詞によってはかなりの頻度で複数形で使用されるものがあることが確認された。100回以上の頻度で複数形使用が確認された5つのshell nouns (fears, signs, claims, suggestions, hopes)ならびにfactsの使用状況を分析した結果、shell nounsを複数形にする要因にはいくつかの種類があり、かつ、名詞によって関与する要因(複数形にする理由)は必ずしも同じではない可能性があることを推論した。

[facts that...] (「…という事実」)については、Quirk. et. al. (1985) が指摘しているとおり、続くthat節の数の複数性 ([facts that<sub>1</sub>... and that<sub>2</sub>...] : 事実の内容が複数存在する) が主な要因であることを示唆するデータが得られたが、特に複数形頻度が高かった5つの名詞においては、その要因の顕著な関連性を確認することはできなかった。

[fears that...] (「…という不安感・恐れ」)ならびに [hopes that...] (「…という期待感」)については主に強意という要因(不安感・期待感の増幅: ただし不安・期待の内容は1つ: ['a fear'<sub>1</sub> + 'a fear'<sub>2</sub> that...] / ['a hope'<sub>1</sub> + 'a hope'<sub>2</sub> that...]) が関与している可能性を推論した。

[signs that...] (「…という兆候」)については兆候の数の複数性(兆候<sub>1</sub>, 兆候<sub>2</sub>, ...: ただし兆候が示唆している内容は1つ: ['a sign'<sub>1</sub> + 'a sign'<sub>2</sub> that...] /) という要因が、また、[claims that...] (「…という主張」)ならびに [suggestions that...] (「…という示唆」)においては主張・示唆の回数の複数性(主張・示唆<sub>1</sub>, 主張・示唆<sub>2</sub>, ...: ただし主張・示唆の内容は1つ: ['a claim'<sub>1</sub> + 'a claim'<sub>2</sub> that...] / ['a suggestion'<sub>1</sub> + 'a suggestion'<sub>2</sub> that...]) がそれぞれ関与している可能性を推論した。

さらに、基教詞やmany, (a) few, theseなど複数を明示する限定詞類との共起関係を調べた結果、signsではある程度の頻度で確認されたが、それ以外のfears, claims, suggestions, hopesではほとんど確認されなかった。このことから、少なくともfears, claims, suggestions, hopesの4語については、複数形を使うといっても、具体的な数を示すような複数形ではなく、数については曖昧さを残しながら、かつ、非複数形では伝えることのできない何か(強さ、頻度など)を示す性格のものであることが推測される。

また、複数形shell nounsの文中での使い方においても、例えばsignsでは全体の約7割が存在を表すthere構文であったのに対し、claimsでは6%以下というような、名詞によってかなり明らかな違いがあることも明らかになった。

以上の結果は同じshell nounsでも個々の名詞によって、複数形での使用頻度も、背後の複数性の根拠も、文中での使われ方も、かなり異なる可能性があること示唆するもので、個別名詞ごとの研究の必要性が示されたと考える。

本研究はいくつもの点で調査の対象を限定した。まず、全体でもわずか20個という数の名詞の調査であり、shell nouns全体での複数形使用の実態は知るには不十分であることは明白である。本研究ではSchmid (2000) の非複数形shell nounsの頻度順の上位20語を調査したわけだが、非複数形での高頻度が複数形での高頻度を示すものとは限らず、今後は幅広い名詞の調査が必要である。また、本研究はSchmid (2000) のshell nounsの中でも、postnominal *that*-clauseを伴うものに限定した。同じpostnominal clauseでも*to* infinitive-clauseを伴う場合はどうなのか、また、同じ*that*-clauseを伴った場合でも、パターンが異なる場合（例えば、[shell NP + be + complementing *that*-clause]）などはどうなのか、など、はまったく不明である。さらに、本研究はSchmid (2000) の非複数形shell nounsの研究によるところが多かったわけだが、Schmid (2000) の利用コーパスがBank of English (British section)であったのに対し、本研究はBritish National Corpusを利用したため、同一名詞の非複数形・複数形の割合の比較はできなかった。例えば名詞によっては、一般的な使い方では非複数形・複数形のどちらも頻繁に使うものでも、shell nounとして使う場合には、非複数形もしくは複数形に大きく偏りがみられる可能性も現時点では否定できない。今後の研究で多くの名詞をclauseの種類、パターンの種類、なども考慮した上で、同一コーパスを利用して、分析することによって、shell nounsの全体像が明らかにしていく必要がある。

また、今回は専らコーパスデータを基にした研究であったため、複数形を使うことによって伝えているのではないかと推測した強意などの意味的効果の検証は行うことができなかったため、今後は母国語話者の判断を求めるなどして、明らかにしていく必要がある。

本稿における複数性の根拠を探る部分についての議論は筆者の現時点での推論の域を越えるものではないが、複数形shell nounsの頻度検証という点においては、かなりの頻度で複数形で使用される名詞の存在の可能性を示すことにより、今後のshell nounsの研究で複数形をも含めた研究の必要性を主張する多少の材料は提示できたのではないかと考える。先行研究でほとんど注視されることのなかったshell nounsの複数形の研究、さらには、不可算名詞ならびに定冠詞の使用も含めた「名詞の形」の選択原理の全体像の解明に向けての研究がさらに進むことを期待したい。

## 参考文献

- Francis, G. (1986). *Anaphoric nouns*. Discourse Analysis Monographs 11, Birmingham: University of Birmingham Printing Section.
- Halliday, M. A. K. and R. Hassan (1976). *Cohesion in English*. Longman.
- Ivanic, R. (1991). Nouns in search of a context: A study of nouns with both open- and closed-system characteristics. *International Review of Applied Linguistics in Language Teaching* 2, 93-114.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech & J. Svartvik (1985). *A comprehensive grammar of the English language*. Longman
- Schmid, H. (2000). *English abstract nouns as conceptual shells: from corpus to cognition*. Mouton de

Gruyter

Vendler, Z. (1968). *Adjectives and nominalizations*. The Hague: Mouton.

Wierzbicka, A (1988). *The semantics of grammar*. Amsterdam -Philadelphia: John Benjamins.

Winter, E. O. (1992). The notion of unspecific versus specific as one way of analyzing the information of a fund-raising letter. In William C. Mann and Sandra A. Tompson, eds. *Discourse descriptions*. Diverse analyses of a fund-raising text. John Benjamins, 131-170